



大阪で発行されて113 アナキストの新聞「自由連合」に、右のよきなく特別号の発行企画が載っていた。(同誌 35号)。



私 R.R. が個人責任で週刊三文評論を発行し、私個人の勝手・好みで、それを送りつけた、というのには、ヤミクモに(売名的に)送って113よきなく、実は、さうではなかつた。つまり、私 R.R. が書いたもの(つまり週刊三文評論)を読んでも欲しい、というその人に私は送りつけているのだ。(送られた人は、迷惑がもたらぬが)。だから、この「自連く特別号」のよきなく、直接、誰に譲渡したのか不明なよきなく形態での配布は、私 R.R. は好まないのである。これが、「自連く特別号」への参加を私がためらった主な理由だ。



しかし、「自由連合」は、私の尊敬する向井孝さんや黒川遥君たちの出して113新聞である。その新聞の「特別号」発行企画が判明した以上、それに乗っかってみたり気がしたのだ。吳越同舟がもたらぬ。が、「吳越同舟」は、もともと週刊三文評論の得平とするこころだ。とにか、乗船させてもらつた。

三文評論読書会へのお誘い

自連は万人によって定められることを自ら欲し、読書は万人によって受けられることを自ら望む。今知れぬと天を待たぬの強みより進んで進歩することには進歩の切実なる要求である。

毎月1回、読書会を開いていますので、御参加頂ければ幸いです。直接御出席下さっても、通信で御参加下さっても、どちらでもかまいません。貴方の御都合のよいようになさして下さい。

テキスト: 3ヶ月分、同一の本を連続して読んで下さる。

直接御出席のばあい(下記へおいで下さい)

1. と き: お問い合わせあれば、お知らせします。(通例は)毎月第1土曜日午後1時半より4時半までです。
2. と ころ: お問い合わせあれば、お知らせします。

会合は、通例、自己紹介→読書会あての手紙や読後感想文の朗読→テキストについて話し合い→雑談、の順で出席者全員に発言してもらっています。時には、自己紹介→雑談、だけのこともあります。会費は不要ですが、御参加頂ければ幸いです。

通信で御参加のばあい(返信書ケットへの御回答は、下記へ、週刊三文評論に載せて下さる。)

遠方にお住いとか当日ちょっと都合が悪いとかその他の理由とかで、読書に間に合いませんが御出席頂けない場合や出席したくない場合は、通信で御参加下さい。その場合は、上記のテキスト(または最近あなたが読み終わった本)について、読後感想文を400字詰原稿用紙5枚以内(または「長野郵便局私書箱41号」若しくは「読書会」あてに送って下さい。毎月の定期会合のさいに読み上げ、適当と認められれば、私どもの発行している雑誌「三文評論」に掲載します。(原稿料はお払いして下さる。御承知下さい)。なお、此の雑誌を欲しい人は、その旨を申し添えて下さい。(1部500円前後です)。

同封 返信書ケット(返信には返信書ケットを利用下さい)

- ① 此の読書会の通知を差上げた方がよいような、貴方の友人を御紹介下さい。なるべく沢山の貴方の参加を促す、充実した読書会にしたいのです。
- ② 次回にはテキストとして何を取り上げたいか、貴方が御希望下さい。読書を愛好する人々の意向にそって、会を運営してゆきたいのです。



それで、週刊三文評論のこの号(No.271)は、113よきなくより500部余計に刷って、それを自連大阪に送る。

今迄、私 R.R. から直接週刊三文評論を送って113以外の人たちに、自由連合を媒体として、此の週刊三文評論が届き、その人々からの応答が得られたなら、それほど嬉しいことはない。おカネも無いくせに、返信料金を取人私を利用して113よきなく、貴方からの応答を得た113よきなくだ。

1972年2月8日 R.R.

「三文評論」の今回の会合は貴方をキレるためのものでもなく、「思想的にカク」するものでもありません。気楽に自由な(どちらかと言うと、なまぬるい)話し合いの場です。参加しても何も損はないかもしませんので、あまり御期待なさらないで下さい。読書会会費として、1000円以内の「カンパ」を送って下さい。送って下さった方には、引き換え、113よきなくお送りします。他にもっと重要な仕事があるとお考えの方、そうではなくても何となく気乗りしない方は此の呼び掛けを無視して下さいかまいません。資金カンパして頂けるならば、郵便振替「長野164番 三文評論」へ郵便局で払込んで下さると幸いです。今迄は、上のようお願ひして113よきなく、113よきなく、今後は決めた「内」のよきなくして下さい。伊まお貴方の同人誌、個人誌、サークル誌のために、貴方個人の研究、或は運動のために、貴方のおカネをつかって下さい。そして、その産物を「三文評論」に、寄附して下さい。か、通信参加の形で、研究成果をお知らせして下さい。1971.11.25

週刊三文評論

三文評論

Sanmon Hyouron
長野中央郵便局 私書箱 41号 Japan

東天紅の個人責任で発行して113週刊三文評論は、現在大変な週刊状態を、まことに済みません。でも、週刊とは言え、週刊のペースで発行しますので、どうか御了承下さい。この号の原稿を印刷所に渡した昭和四七年四月七日



「三文評論」は、かつては、同人雑誌だ。それが、113よきなくから、やけなくなり、今は、私 R.R. = 東天紅が個人責任で発行を継続して113、「個人責任」というのは、「個人誌」としてというのでは、やせ、=2人しか、つかう。113よきなくは、「同人誌の一時あつかりの形」ということ、将来再び同人組織に戻す、という含みがある。事実、週刊三文評論のよきなく「通信」形式のよきなくは、個人責任で、個人の費用負担でも発行を継続できる。しかし、雑誌ともなると、それはゆかぬ。事前に分担金額を決めて、それは執筆者に負担して貰うという保証が無くて発行しかねる。「自発性によるカンパ」と言っても、アタリにはなすぬ、計画が立たぬのだ。それは、今迄の私の経験が私に苦い教訓を与えてくれた。



「組織」というコトバは非常に多義的で、論者相互にハナシが通じ合わぬ113よきなくが多い。ここでも、話が通じ合わぬ危険を覚悟して、話を出す。



「自由連合」という組織論は、その組織(?)の構成メンバー(?)の間に共通の問題意識が無くては、実現不可能なのではないかと、私は考へる。「会員制」の組織論(これを、私は自由連合組織論と対比させて113よきなく)のよきなくは、「会員になる」という誓約が「共通の問題意識を代行してしまふので、形式的には問題がな。しかし、「代行」という点で、実質的な問題が生じてくる。



「自由連合」論による組織のよきなくは、実体的なある事業を代行しようとする努力がなすは、当然欠落が出てくるので、その前後に「共通の問題意識」を掘り起し、再確認する作業が「不可欠」と私は考へる。「自由連合」とは、好き者同志が集って、好きなことをやるのよきなくは、わけがつかう。それから、此の「共通の問題意識」の掘り起し・再確認という作業は、(狭義の)構成メンバーの間だけでなく、自由に連合し・離散する「自由連合」組織の予備軍ともなり得る人々の間にまで範囲をひろげて、為さねばならぬ。

以上は、私 R.R. の 昭和四七年四月四日現在における見解である。



「耳が遠くなって、電話でも
つい大声を……」と中野重治
氏＝東京・世田谷の自宅で

中野重治詩集 108 107

このとつとつあんにも呉れたもの
そしてやつぱりとつとつあんが
胸ときめかせて讀んだもの
受けた影響かぞえれば
まずこれこれといったこと
お前にや向かぬか知れないが
まあ持つてつて讀んでみな
孫めの拒絶おそれつ
いささか照れていながら
例の水をば出すだろう
して見りや本はやすいもの
世間のおやじよおふくろよ
または息子よ娘らよ
高い本なぞつい買つて
お前の気分がふさいだら
たとえ子持ちでなくつても
お前をとつとつあんはかあちゃんに仕立て上げ
息子や娘を配置して
そして気分を直すがいい
それがほんとの本好きの
本を大事にする仕方
してまた子孝行孫孝行
人の人たる氣慰め
社會的衛生といつたもの
——なんかんとおれが手のなかの
買った本をば眺めつつ
頬つべたあたりさすり見る

中野重治詩集

中野重治詩集 109 105

中野重治詩集

高い書物を買ひこんで
おれは父もや気がふさぐ
そうしておれは思ひ出す
おれの先祖のだけ一人
おれに書物は呉れなんだと
なるほどおれは傳つたが
あれはおれで本じやない
けれどもおれはやるだろう
おれがじいになつちまい
息子が あるいは娘が大きくなつた時
「これはとつとつあんが若い時
こんなわけ合ひで手に入れて
胸ときめかせて讀んだもの
受けた影響かぞえれば
まずこれこれといったこと
お前にや向かぬか知れないが
まあ持つてつて讀んでみな
息子の拒絶おそれつ
いささか照れていながら
更にもおれは懲ばつて
その上こんな考える
おれの息子も孫を生み
そいつが大きくなつた時
じいになつた息子めが
ある日孫めをつかまえて
「これはとつとつあんが若い時
じさまがわしをつかまえて
こんな説教鳴らしてつ

眼と耳が弱った

▼▼中野重治

「眼が弱って、耳が遠くなって、電話でも
つい大声を……」と中野重治
氏＝東京・世田谷の自宅で

未亡人にも生きがい

昨日は、一週間の飛行や若い人
未亡人の生活を送り
たいもの、毎日の生活を送り
自分の暇の時間にあてている
いふに、未亡人たる
うを内にほり閉じて、自分の生活
を「ジョイ」していったら、精進
楽しい人生を送るべきではない
だろうか

「おれは未亡人として自分
で生きていこう。今年も張り切っ
て過ごしたいものと思つてゐる。
（最前市・杉田小百合・35歳）
信毎1月9日号

と113のようなことが罵々言われるけれど、空しいものだ
と思つた。



中野さんの詩で私が好きな詩は、上に
無断転載した「Impromptu」の I. だ。
「高い書物」と113のは、何だ？ 33か？
K. マルクスの「資本論」だ？ 33か？ とともに
レーニンの「国家と革命」だ？ 33か？ 113にしたも
固禁の書に間違いはあるまい。



私がホンモのジジイになつたとき、
息子や孫たちに、どんな本をやつたか、と考へる。



美しく年若い時、杉田小百合が、彼女の平元
から飛び去つてゆく子供たちに、どんな
一冊の本を平渡すであつたか？ せめて
此れを讀む貴方は、ジジイ（か ババア）になつた時、
どんな本を子供に呉れるだ？ 33か？ 私は、それを知りたい。

週刊ヤニヤニ

朝日新聞の1月17日号で、上記のような記事を見つけた。中野重治も
サイヤマになつたなあ、と思つた。私 R.R. は、彼ほどに年寄りではな
いが、途中で死ななれば、113か、彼のような年寄りになる。
私は「物書き」ではなから、「暮れは29日まで原稿書き」と113とはなつた33か、
「餅つき」とか「机のまわり整理」なんという仕事は、その年令になつてもせう
113だ。そのたびに、腰が痛くなつたりしては大変だ、と今から心配してゐる。



中野重治さんの話を聞く会、と113のがある、1969年と1970年と
は、私はそれに出席した。中野さんはゴホゴホとせきをしたが、
話をされた。1971年には、あつたのか無かつたのか、私には通知さ
無かつた。何を取つても覚えてくれれば、私みたくに忘れられてゆく人間
もあつた。



修学旅行で奈良一行したとき、明日香の石舞台を見考へた。昔、此
の石舞台に暮らした人は我が名を後世に残さうと思つて、どんなに大
きなおハカを建て、その中に這入つたの？ 33。しかし、今では中は
からドゥで、誰のものか名前も伝へない。「名を後世に残す」と

